
MUV-LUV-ZOE

ikutachi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M U V - L U V - Z O E

【Nコード】

N 1 8 8 5 0

【作者名】

i k u t a c h i

【あらすじ】

時の最果ての管理人は、鑑純夏の声聞き、たまたま、タイミン
グよく死んでしまった、オタクな男をM U V - L U Vの世界へ送る
ことにする。その男は、かなり反則気味な願いをかなえてもらい、
あの戦場しかない世界へ旅立つことになる。

初投稿作品です。不慣れなまま書いています。

かなりのご都合主義とか、ありえない展開だらけになると思います。
生暖かい目で見てください。

目指せハッピーエンドでの完結！！

更新は不定期です。独自設定および独自展開。独自解釈が多くなる
と思います。

原作は参考程度だと思ってください。
それでもいい方は詠んでみてください。

平行世界へ行くために（前書き）

修正しました。

平行世界へ行くために

ここは、図書館のような場所。

明かりとなるものが少なく、かなり暗い、中でもこのあたりは特に。

こんにちは、自己紹介しておきます。僕は、「時の最果て」の管理人をしているものです。

名前はないので好きに呼んでください。

「時の最果て」とは、最も過去であり、遙かな未来でもある場所・
・なんだそうです。

意味わかないでしょうけど、まあ、我慢してください。

僕はここの管理人になってかれこれ300年くらいなんですが、ここには色んな情報があります。

よく言う「アカシックレコード」と呼ばれるものと同じだと思ってください。

ここにはあらゆる世界の情報があり、それぞれの世界に対して干渉もできます。

まあ、やったことはないのですが。

で、つい2、3日前、女の子の声が聞こえてきました。

「誰か、タケルちゃんを助けて！」

こんなことは初めてだったんで、今までどうしたものかと悩んでいました。

で、悩んだ末、その声が聞こえてきた世界に、あなたを送ろうと思いいここにお連れしたしだいです。

と、今日の前で、黒い犬がしゃべっている。

私は全く理解が出来ず、とりあえず黒い犬のことは置いておいて状況把握に努めることにした。

まず、自分が誰か、ということとは理解できている。

名前は羽島洋人、享年35歳。

そう、私は死んだはずの人間だ。

わたしは職場に向かう途中に事故にあって死んだのだ。

その瞬間までよく覚えている。

短めの人生ではあったが、まあ、事故の理由からして運転中の不注意が原因で気がついたときには峠の崖に落ちていた。

自業自得、幸い家族もなく気楽な一人暮らしだったので、思い残したことといえば仕事の引継ぎが出来ないことと、部屋にある私物のことくらいだ。

結構なオタクなので、部屋に残っている私物はもちろんそういうものが大半だ。

特にロボット物が好きなので、少しでもメカメカしい物が出てくる作品なら大抵は手に入れていたりする。

某機動戦士や、某時空要塞シリーズにはじまり、機動兵器の出てるものは大体あると思う。

恥ずかしいとかではないが、苦勞して集めていたのでもったいないという気がする。

「あの、聞いてますか？」

黒い犬がこつちを覗き込んでいた。

「ああ、ごめん、ええと結局私は死んだんだよね？」

とりあえず確認。

「ああ、そうですね、あなたの生きていた世界ではあなたは死んでいます。ご愁傷様です。」

「じゃあ、あれか、二次創作でよくある転生みたいなものをさせるということ？」

黒い犬に尋ねる。

「そうですね。」

うなずく犬。

「どういう世界なんだ。」

「おや、納得するんで？」

いかにも不思議そうに尋ねてくる黒い犬。

「まあ、このまま死んでしまうよりいいかなと。」

思ったことを言ってみる。

「ふむ、そうですね、では、送る先の世界について説明しましょう。」

「

黒い犬がフムフムと頷いて説明を始めた。

と言っても、最初の一言でどんな世界が分かってしまった。

「あなたを送る世界は、M U V - L U V A L T E R N A T I V

E と言うゲームの世界です。」

・・・・・・

なんですと？

そういえば、タケルちゃんをどうのと言う声を聞いたとか言ってたな。

死亡フラグだらけの世界か・・・。

「まあ、あなたなら大体分かっていると思いますが、正確にはその世界の並行世界です。あなたの知っているゲームの世界とは多少異なりますが、助けを求めてきた少女の世界に干渉してあなたの存在を上書きして少女の世界に転生することになります。」

助けを求めてきた？

そういえば記憶が確かなら、彼女が願うのは『タケルちゃんに会いたい』だったような気がするが。

「かなり厳しい世界なので、あなたの望むものを3つ用意します。その上で、身体能力の向上、知識の付加を行います。」

なに？

望むもの3つ？

「な、何でもいいのか？」

「大体のものなら。用意できますよ。」

「おお、すごいぞ、じゃあ、某機動戦士とか可変戦闘機とかを持って
いけるってことだな！！」

BETAを相手にするにしても、あの世界からすれば明らかなオー
バーテクノロジーだが、だからこそ無双できるじゃないか！！

「何かありますか？ああ、あなたのオリジナルとかでも可能ですよ。
細かい設定とかいりますけど。大体のものは再現できますからね。」
なんと・・・至れり尽くせりだな。

待てよ、なら、あのゲームの機体はどうなんだ、あの機体、特にネ
イキッドなら、ほとんどの攻撃を無効化できるし、普段の状態です
ら、シールドをつかえば、レーザー級のレーザーも防げるはずだ。
なにより、あれほどの高速起動が可能な機体なら、短期でのハイブ
の攻略すら可能はず。

「ANUBIS-Z・O・E - と言うゲームの機体はどうか？」

「ほうほう、ちょっとまってね。・・・可能だけど、装甲とかに使
われるメタトロンの扱いをどうするかだね。」

そう、ジェフティやアヌビス等のオービタルフレームの技術の根幹
を成す素材、メタトロンは地球上には存在しないレアメタルだ。

「・・・よし、君には、メタトロンやオービタルフレームの開発に
必要な知識をすべて与える。メタトロンに関しては君が生まれる前
くらいに隕石として落としておくよ。」

開発知識か・・・。

「で、落ちてきた隕石を君の家族が回収して研究していたことにし
よう。」

「大まかにはいいんだけど研究施設じゃなくて、研究開発が可能な
移動要塞としてアーマーンをもらうとかできる？」

だめもとで聞いてみた。

「むり」

即答だった。

「アーマーンがどんだけの規模かわかってるか？あれだけの要塞をしかも移動要塞って、無理に決まってるだろ、せいぜい開発設備が整った戦艦くらいのもだよ。」

「思ったら十分なものが出てきたので、よしとしよう。」

「記憶は引き継ぐのか？」

「これも結構重要だ。」

世界を変えようと思ったとき、ゲームのことは覚えていたほうがいい。

「ああ、今の君の記憶を持ったまま転生することになるかな。」

「生まれたときからやり直すのか・・・」

幾つかの転生物の二次創作を読んでいて思ったが、あれは結構きついだろうな。

「まあそうなるけど、自我が確立するまではそもそも記憶がどうのって理解できないと思うよ。考える力が身に付いたくらいに理解できる感じだね。」

「だいたい3、4歳くらいか？」

「それならまあいいか。」

それから、黒い犬と二人？で、色々細かいことを打ち合わせ最後にひとつ疑問に思ったことを聞いた。

「なあ、黒犬さん。」

「なに？まだ注文あるの？」

「なんで私が選ばれたんだ？」

そう、ここに来て私も色々葛藤していた。

これは夢なのか？と最初思い、なんてオタクな夢を見ているんだと自己嫌悪して、どうやら現実だとわかったら、今度はなぜ私だったのか、自慢にもならんが、私は聖人君子というわけでも誰かを助けたりとか心がきれいだとか、そんなことは全くないすばらしいくらの俗物である。

「ああ、選んだわけでもないんだけどね、タイミングが良かっただけ。」

「タイミング？」

「そう、世界を改変するって言うのは新しい並行世界を作ることになるんだけど、それが出来る人間ってかなり多くいる。そんな中で、たまたま君が死んだのが見えたから、じゃあこの人にしよう。みた
いなかんじ。」

たまたま、私だった。

・・・

「君のせいで私が死んだとかでなく？」

「全然。」

なるほど、私は運がいいんだな。

たとえ送られる世界が、絶望だらけの世界だとしても。

甦れるのなら、運がいい。

「さて、じゃあ船と、オービタルフレームやLEVなどのメタトロンの知識、素材となるメタトロンのも、オービタルフレームを10機ほど作れるだけの分量を船に積んであるから。で最後に君の向こうでの名前はとうする？」

名前か、

「同じでいい。」

羽島洋人、なれてるしいまさら違う名前で呼ばれてもなあ。

「そっか。」

黒い犬はひとつ頷くと、

「じゃあ、これから転送する。何をしても君の自由だけど、出来ればあの子の望みをかなえてやってくれ。」

「ああ、出来るだけがんばってみるよ。」

そういつた瞬間に意識を失った。

平行世界へ行くために（後書き）

随時編集していきます。

多少時間がかかると思います。

設定その他・随時変更します（前書き）

設定です。

色々変更していくと思います。

修正しました。

設定その他・随時変更します

名前 羽島 はしま 洋人 ひろと

生前は35歳のオタクなおっさんだった。(主にロボットもの)

時の最果ての管理者によって並行世界に上書きされる形でこの世界へ転生した。

もとは、あぶないものには近寄らない事なかれ主義。

転生後の性格も大きくは変わっていないが、多少好戦的にはなっている。

身体能力はかなり高い。

容姿に関しては、可もなく不可もない感じ。

また、ロボット工学、および、メタロン技術の知識がある。

複合金属メタロロンに関しては、1973年に中国にBETAの降下ユニットの飛来と同時に日本の近海に落ちてきた隕石と共に洋人の祖父が発見しこれが切り札となるかもしれないと考え、各国には秘匿して研究していた。

このことは、帝国軍の上層部の中でも一握りの人物のみが知っている。

具体的に言つと巖谷 榮二中佐や紅蓮大将は知っている。

1993年ごろから研究施設でもある船に出入りして研究に関わっている。

1998年7月にジェフティが完成した。

第1話 京都防衛線（前書き）

修正しました。

第1話 京都防衛線

この世界に生まれて自分の記憶を理解できたのは3歳のころだった。父親は羽島海道、母は羽島早苗。

祖父は僕が生まれる数年前に亡くなったらしい。

両親が言うには紅蓮大将の戦友だったらしい。

1973年に中国にBETAの着陸ユニットが落ちたと同じときに日本近海に落ちてきたメタトロンを含む隕石をたまたま目撃し、当時は衛士だったらしいのだが自分の隊を率いてそれを回収。

その隕石に含まれるメタトロンを持ち帰り、その特性に気づいた。

その当時はまだ利用できるほどの技術力はなく、それでも将来対BETA戦において切り札となる可能性がある素材であったため、当時の政威大將軍に許可を貰い極秘の研究機関を設立。

僕が生まれる数年前に亡くなるまで研究を続け、いまは両親が後を引き継いで研究を続けている。

まだ口を出せるわけではないが、どうやら管理者と話し合った設定は問題ないようだ。

ある程度成長するまではとりあえず自分の体を動かすことになれる。というのも、生前の自分の体より数段性能がいいのだ。

おかげでまだうまく動けない、幼児だからというのもあるだろうがただ、学問のほうでは自重せずに少し後ろめたいが天才児ぶりを発揮することにした。

両親に僕が研究を理解できることを知ってもらえばより早い段階でジェフティを造ることもできる。

1998年。

数年前に研究施設でもある船が完成した。

そして15歳になった僕は両親と共にそこでジェフティの製作に取り掛かっていた。

数ヶ月かけて機体を完成させソフト方面もA D Aのプログラミングを終了。

残念ながら光州作戦には間に合わなかったが、ジェフティを製作する過程で得られた様々な技術を国内の戦術機には流用して性能を引き上げている。

まだ外国にまで広まっではないが、今現在帝国軍に配備されているほぼ全ての戦術機には反映させている。

O Sに関しては簡単にはいかなかった。

高性能なO Sは作ることではできた。

だが機体のほうがそれについてこない。

管制ユニットの方から改良を加えないといけないらしい。

一部の部隊に実験的に改良を加えている。

おかげで少しではあるが衛士の生存率は上がっている。

7月末。

ジェフティは完成した。

奇しくも京都にまでB E T Aが侵攻してきたこのときに。

「洋人、ジェフティを出せるか？」

羽島海道大尉、父だ。

「ああ、いけるなA D A。」

「問題ありません、出撃可能です。」

独立型戦闘支援ユニットA D Aに確認を取る。

「なら頼むやつと完成した機体だ正直テストもせずに行かせるのは不安だが。」

「大丈夫ジェフティの性能でくれを取ることはないさ。」

「よし、なら行ってこい！」

ジェフティを起動し船から出る。

ここからなら短時間で京都までいける。

月詠 真那 side

もうずいぶん長い間戦っている。

BETAが、京都に侵攻してきてからどのくらいの時間戦っているのか、もうわからないくらいだ。

かなり押されてきている、が、市民の大半は避難を完了している。後もう少し、残る市民や、皇族の方の避難まで、なんとしても持たさなければ、

「各員、あと少しだ、奮起せよ！」

殿軍の大隊長である青い瑞鶴から檄が飛ぶ。

そう、あと少しだ、そう思ったとき、左翼の部隊が大きく崩れた。

「駄目だ、うあああ！！！」

「くるな！、くるなああ！」

「いやだ、たすけて……」

衛士たちの断末魔の声、

「左翼が！各機援護しろ！！」

私は、自分の小隊に命令を下し、左翼の援護に向かう。

だが、もう持たないことはわかっている。

少しでも時間を稼ぐため、私は部隊を鼓舞し、水平跳躍でBETAに向かう。

前方に要撃級が数対、突撃砲を撃ち込み牽制する。

そのまま撃破出来ればよし、駄目でもとものつもりで、長刀を構える。

と、不意に横からの衝撃、

「な！？しまった！！」

機体の左腕が吹き飛ばされたらしく突撃砲が失われた。思わず目を閉じた。

しかし、いつまでたっても最後の衝撃が来ない。

不思議に思い、目を開ける。

そこには、見たこともない戦術機が宙に浮いていた。

.....

浮いている？！

その機体は、地上に立っているのではなく、地上3メートルくらいで静止し周囲のBETAを睨み付けているノイズ交じりの映像が見えた。

洋人Side

さて、今の時刻は深夜2時、ジェフティの性能のおかげで、すぐに京都についた。

のはよかったのだが、すでにBETAの襲撃を受けている。

こちらに気づいた光線級のレーザーもガードしていれば何の影響もない。

戦場についてすぐに左翼の部隊が崩れ始める。

それを援護するために一部の機体が動いていた。

その部隊の先頭の機体に、左側から接近するBETAの群れ。

「？気づいてないのか！？」

その機体は、要撃級の一撃で、左腕を吹き飛ばされ立ち止まる。

「ADA行くぞ！」

「了解、ゲイザーの使用を進言します。」

「頼む！」

ゲイザーというのは、ジェフティのサブウェポンのひとつで、敵を麻痺させ行動を阻止する機能を持っている。

それを損傷した期待の周囲にばら撒く。

そのゲイザーの光に当たったBETAは動きを止めた。

生物にも効くようになっていたらしい。

「敵の阻止に成功しました。」

ADAが結果をしらせてくれる。

「このまま突入する。」

「了解」

ぼくは、損傷した機体を守るようにその前にジェフティを降下させ

る。

「帝国ス衛軍の衛士の方々いまからBETAを押し返します。その間に撤退を！」

外部音声と通信機で周囲のス衛軍にそう言ってからBETAに対して攻撃を始める。

まずはゲイザーで動きを止められていない後方に向かってホーミンググミサイルを放っておき、同時にマミーを起動して攻撃された瑞鶴を簡易ではあるが修理する。

マミーと言うのもジェフティのサブウェポンで全方位からの攻撃を防ぐ実体シールドで、その中で機体を修復する事も可能と言う便利なものだ。

ただしジェフティに関しては完全な修理が可能だがその他の戦術機に対しては簡単なりペアしか出来ない。

つまり欠損した部部の修復等は出来ない。

「瑞鶴の衛士さん無事ですか？」

再び月詠 真那side

『瑞鶴の衛士さん無事ですか？』

「あ、ああ、なんとか。」

何が起きているのか全く理解できない。

ついさっきまでレッドアラートだらけだった機体が、今では左腕の欠損以外すべて正常な状態にまで回復している。

これも、この機体のやったことなのだと思うが。

あまりにも理解が追いつかない状況に頭がどうにかして夢でも見ているのかと思う。

『機体の修復はある程度できました。動けるなら後退してください。』

後退しろ？

まだ、状況に頭がついてこない。

BETAに囲まれている今の状況では一瞬の判断の遅れで命を失うはず、だがいまだに私は生きている。

色々とありえないことが重なりすぎて何がなにやら理解に苦しむ。どのような状況であれ、冷静に事態を把握し最善の行動を取れるよう訓練してきたつもりだったが、まだまだだったと言うことか。

「すまない、援護は必要か？」

たいしたことができるわけではないが、ないよりはマシだろうと尋ねる。

しかし、

「いえ、それよりこの機体の周囲から離れてください。」

「しかしこの数相手で・・・」

「大丈夫です。むしろこの機体の性能を発揮するには、周囲に味方は少ないほうがいいんです。」
なにしろあまり時間の余裕はない。

「月詠中尉撤退しなさい。」

殿軍の指揮官から通信が入る。

指揮官までが撤退しろと言う。

ノイズ交じりにしか見えない機体を見る。

「了解、下がります。」

いったいこの機体は何なのか、一応記録をとりつつ後退する。

が、下がり始めた次の瞬間には、その機体はそこにはなかった。

「?!消えた?」

そうとしか見えなかった。

そして数瞬遅れて、その周囲にいたBETAが吹き飛ばされていた。

再度洋人side

「月詠中尉撤退しなさい。」

指揮官から、瑞鶴に対して撤退を命じている。

五摂家の方だったと思う。

政威大將軍に連なる人間にはメタトロンの研究についてある程度の情報が渡されている。

しかし、紅いからそうかなとは思っていたが、月詠中尉だったらしい。

それはともかく、

「A D Aゼロシフト使える？」

「問題ありません」

ゼロシフト。

ジェフティと兄弟機であるアヌビスが最強たる所以である兵器。

メタトロンの空間圧縮効果を利用した格納装置であるベクタートラップ。

それを活用し空間圧縮、復元する際の反動で亜光速移動を行うシステム。

ゼロシフトによる機体の移動速度は光速に限りなく近いため、その移動時間を認識、知覚することはまず不可能である。性質上、軌道上に存在する全ての物体を弾き飛ばすが、建造物に対しては破壊可否問わず激突するとその場で停止してしまう。

瞬間移動中の機体は攻撃を受けても全く損傷しない。

つまり、無敵状態。

これを繰り返せば、多少の時間はかかるがB E T Aの殲滅も可能である。

まあそんなことをするわけではない。

「サブウェポン・ゼロシフト起動します。」

僕は、ゼロシフトでB E T Aの群れを突き抜ける。

そして、群れを一直線に見れる場所に出る。

「ベクターキャノンスタンバイ」

発射までに時間がかかるが、メタトロンの圧縮空間能力を利用した空間破碎が可能で、圧縮空間による質量断層が存在するシールドも破壊できる。

発射には機体を足場に固定する必要がある。正面にいる敵は自動的

にロックされ、発射時に照準内にいれば自動的に撃ち落とす。
つまり全てのBETAを照準内に収めるためにゼロシフトを行った
わけだ。

「全敵を照準内に確認。発射準備完了です。」
全ての準備が整った。

「ベクターキャノン発射！」

三度月詠 真那side

その瞬間の光景はまさしく希望の光と呼べるものだった。
あの機体を見失った次の瞬間、眼前に無数にいたBETAの群れが
光に包まれ消し飛んでいたのだ。

この戦いに参加したすべての衛士の共通の認識だろう。

周囲を見回しさっきの機体を探す。

かなり離れた場所にノイズが走る。

どういう原理かは解らないが、映像に残らないような処理がされて
いるようだ。

おかげで機体の位置を探すのは簡単だった。

『先ほどの機体の衛士応答してくれ。』

殿軍指揮官が呼びかけを行っている。

考えてみればあの機体はどこ所属なのか？

しかしあの機体は応えることなく消えてしまった。

おそらくあれは実験機か何かなのだろう。

もしあれが味方となってくれるなら。

「私たちは勝てるかもしれない。」

思わずそう呟いていた。

羽島海道side

どうやらうまくいった。

祖父が回収した不思議な鉱物。

後に息子によってメタトロンと名づけられた鉱物がもたらしたものは実は現在の斯衛軍の装備にも多少ではあるが活かされている。

斯衛郡に配備されている突撃砲やミサイルにはジェフティに採用している弾薬等を使用している。

機体の制御系にもメタトロン研究で得られた技術を少なからず流用している。

だがやはり純粹にメタトロンを最大限利用して作られたジェフティの能力は桁違いだった。

完成が遅れたせいで京都は壊滅的な打撃を受けたが、首都機能はすでに東京に移っているし巖谷中佐にもよい報告ができそうだ。

「洋人、大丈夫か？」

息子に尋ねる。

思えばこの息子は異常だ。

何せ10歳のころから私たちの研究を理解し助言まで行ってきた。死んだ祖父も私も人のことは言えないくらいの変人だと自負しているが、息子は輪をかけて異常だと思う。

身体能力の高さ、メタトロンに関する知識、そして今回の出撃のデータからも衛士としての能力もかなりの高さだ。

「大丈夫だ、間もなくセメタリーに戻るよ。」

「そうか、戻ったら戦闘で得られたデータをまとめておいてくれ。」

「わかったやつておくよ。父さんたちはこっちに来れる？」

「いや京都の施設は壊滅したし、一度東京に行つて本土での研究場所を確保する。」

「じゃあ、僕はこっちでちょっとやりたいことがあるからそれを進めてるけど。」

やりたいこと？何をする気なんだろうか？

「何をするんだ？」

「諸外国に対して開示できる機体を開発する。そのうちジェフティのことは各国に知られるからね、そのときに他国に渡しても問題な

い程度の機体を用意しておこうと思つて。』

確かにそういう機体も必要だな。

特にアメリカあたりはうるさそうだ。

「わかつたよろしく頼む。それとよくやったな。」

無事に戻つてくれたことにも感謝している。

何かあつたら母さんに殺されるからな。

洋人 side

さて、とりあえず通常の L E V でも今現在の戦術機より高性能でかつ脱出機能もついている。

とりあえず各国用にファントマを作ろうとおもう。

L E V の開発製作にはメタトロンは必要ではない。

これにビーム砲をもたせれば充分だろう。

何よりこのビーム砲が目を引いてくれるだろうからね。

まあ後指揮官用にバイザックを作っておけばいいかな。

それと、もう1機オービタルフレームを造つておいてもいいかもしれない。

そうなるともう一人誰か優秀な衛士が必要になる、誰かいるだろうか。

第2話 関東防衛線（前書き）

更新再開します。

こんな展開にしてみました。

指摘をいただき編集しました。

第2話 関東防衛線

京都防衛戦ののち、日本帝国は首都を東京へ遷都。

首都の防衛体制を整えようとしていた。

僕は、散発的に出てくるBETAを迎撃しつつ並行して新型戦術機としてLEVの開発。

そしてもう1機オービタルフレームの製作を始めた。

そしてこれからどうするかを考える。

もうすぐBETAが東進を始めるはず。

抑えることが出来ればいいが、ジェフティだけで全ての戦場をカバーすることは出来ない。

横浜の陥落を防ぐにはせめてもう一人一緒に闘える人がいる。

だが今から探しても見つかるものではないだろうし、まだジェフティのことは帝国軍にもほとんど伝えていない。

帝国軍や斯衛軍から優秀な衛士を引き抜くのは難しい。

ジェフティに関しては巖谷中佐や紅蓮大將はある程度の情報は伝わっている。

だが、今はBETAに対する警戒のほうが重要だ。

・・・どうしようか。

とりあえず父さんのほうから横浜方面に住んでいる一般市民の避難は巖谷中佐や紅蓮大將に進言してもらえる。

避難が進めば鑑純夏と白銀武の悲劇を防げるはずだ。

囚われなければ今度は国連軍か帝国軍の衛士になるんだろうけど。

僕と年は同じはず、どうせならここに入ってもらうことは出来ないだろうか？

原作の彼とは違っているが同じ白銀武なのだから、才能は同じように持っていると考えていいと思う。

二人とも一緒に呼べば来てくれるだろうか？

羽島海道 side

近いうちにBETAが必ず東進してくるというので一応警戒レベルを上げてもらった。

洋人自身も散発的に現れる群れを駆逐しに出撃しているが、一人であれだけの時間戦い続けるのはいくらジェフティの性能が高くても無理が出てくる。

その上研究開発も同時に進めるのはさすがに不可能だ。

「洋人、今日はもう休め。」

今はジェフティのデータをまとめている。

このデータを元にもう1機造るらしい。

詳しいデータはまだ見せてもらっていないが、

「体が持たなくなるぞ。」

「わかってる、でも急がないと。いつ奴らが東進を始めるかわからない、今回はジェフティと帝国軍の援護で何とかなるけど、これから先も防ぎきれんかわからない。」

これから先より多くの群れが日本に上陸してくるかもしれない。

そのときにジェフティと同等の性能を持つオービタルフレームが他にもあれば守るどころか攻めることが出来る。

「とにかく休め、データは私がまとめるADA戦闘データをまとめるから手伝ってくれ。」

「了解。」

ADAと協力すれば私でも何とかなる。

少しでも休ませておかないと。

「衛士の仕事でもあるんだからな。」

休めるときに休む。

これも立派な仕事、いざというとき疲れて動けませんではすまない。

「わかった。」

正直辛かったんだろうな、ふらふらしながら出て行った。

「さて、ADAこっちのほうにデータ送って。」

私の端末にジェフティの稼動データを送ってもらっ
すごい機体だな。

これが量産できれば世界征服とか出来そうだ。
だからこそ、もう少しの間秘密にしておく必要がある。
巖谷中佐や紅蓮大將はこの機体を悠陽殿下の復権のための切り札に
するつもりなんだろう。

洋人のほうはそういった政治的なことに関してはどう考えているの
か、なんにしる国外向けにも機体を開発しているあたり考えている
んだろうな。

しかし米軍の動きも気になる。

佐渡島にハイブが建設されたとき米軍はG弾や核の使用を主張して
きたらしい。

だが、国防省は猛反対し結果米軍は日米安保条約を一方的に破棄、
撤退している。

そのおかげでというところと嫌なんだが、ジェフティのことを正
式に帝国軍に情報開示できた。

ジェフティは政威大將軍直属の研究機関によって8月はじめに完成
した機体であり、現政威大將軍煌武院悠陽殿下の命においてのみそ
の力を行使する特殊部隊の機体であるとされている。

まだ洋人のことは悠陽殿下に紹介できていないが、情報はほぼ伝わ
っているだろう。

実際息子は天才だ、12歳位のころに研究施設をかねた大型船が完
成しそこで私の父から受け継いだメタトロンの研究を行っている
ところへ早苗がつれてきた。

そのとき洋人はメタトロンの特性を理解するどころかどういう使い
方が出来るのか、そしてそれを使用した新機軸の戦術機の設計図ま
で用意していた。

驚いたものだ、だがその設計図は完璧なものだった。

そのため1年かけて研究施設である船を息子の設計したオービタル
フレームの建造が可能なように改良し建造を始めた。

その過程で日本帝国陸軍技術廠・第壱開発局へ幾つかの新技术を提供した。

巖谷中佐の話では今までの戦術機のパフォーマンスを向上させることが出来たらしい。

これらの技術の元となるのがメタトロンであり、私の息子というのは誇らしくあるが、同時に息子の危険にもなりうる。

BETAの東進を阻んだあと紅蓮大將はジェフティのことを公表するつもりだろう。

その前に息子と悠陽殿下の謁見があるだろうが、そこでこの先のこととも話し合うことになるだろうな。

月詠真那 side

京都防衛戦以降、散発的なBETAの侵攻をとめていたのは悔しいが帝国陸軍でも斯衛軍でもない。

戦闘が始まると現れるあの機体。

アメリカの秘密兵器だとか、逆に斯衛の秘密兵器だとか色々噂はあるが先ごろ正式に所属が発表された。

政威大將軍直属の特殊部隊。

現行の戦術機に使われている新技术を開発した研究開発を主とする実験開発部隊とも言うべきものだそうだ。

そのため人員はかなりの少数で、技術の秘匿に関してかなり厳しい警戒をしているらしい。

何せ研究施設は東京湾にある大型船でそこに入れるのは政威大將軍煌武院悠陽殿下と技術廠・第壱開発局副局長である巖谷中佐などごく一部の人間以外入ることすら出来ない。

だが、それもあの機体の性能を考えれば当然だろう。

BETAを一瞬で駆逐する光学兵器を搭載し、現行の戦術機を遥かにしのぐ運動性能、そして光線級のレーザーを無効化できるというのが一番だろう。

ゆくゆくは帝国軍の戦術機にも採用されることになるかもしれない。BETAの東進が本格化した今あの部隊の存在は帝国の希望といっているだろう。

今回、BETAの東進に対して初めてあの機体が正式に作戦に参加する。

内密な話として聞いているのだが、あの機体の衛士はわずか15歳であるという。

しかも設計開発もほぼ一人で行ったと聞いている。

どんな人物なのかも気になるが、そういった情報はほぼ隠蔽されている。

対外的には年齢は隠され羽島大尉としか公開されていない。

斯衛に所属するものでも五摂家に連なる者にのみ情報が開示されている。

ここまで秘密主義にする理由もひとえにあの機体を、そして開発者を守るためだ。

まもなくBETAの東進を撃退するための作戦が始まる。

その際も直接機体に乗って合流するということだが。

どうやら来たようだ。

洋人side

BETAの東進が始まったが、今回は僕もはじめて参加しBETAの殲滅にかかる。

作戦においては独立して動いて言いと悠陽殿下の許可をもらえたらいい。

なら自由にさせてもらおう。

出来るだけ被害を減らす。

一般人はもとより衛士の被害もだ。

僕は斯衛軍の集結しているところにまず向かった。

『そちらは政威大將軍直属の特殊部隊のものか？』

あのときの青い機体。

確か五摂家の斑鳩様だったか。

「はい、コールサインはジェフティです。今回の防衛戦では自由に敵を殲滅せよと命令を受けています。」

「そうだな、こちらから援護しようにも性能が違いすぎる。せいぜい後方からの援護射撃が出来る程度だが。」

歯がゆいだろうと思う。

あの人は一度首都を捨てなければならなかった。

その上今も僕に任せるしかない。

自分自身の手でとまではいかなくともせめて援護射撃をという気になるのは当たり前だ。

「お願いします。ただし、前線には極力出ず砲撃戦を行ってください。」

「敵の足を止めればよいのだな？」

「はい、僕はその隙に側面からベクターキャノンで一掃します。」

この戦法なら、こちらの被害はかなり減る。

「ベクターキャノンとはあの時の光学兵器か？」

「そうです、発射まで多少の時間が必要ですのでそれまで、今から僕が発射位置に付くまでとエネルギーの充填の時間あわせて、作戦開始後5分その間砲撃のみでBETAの侵攻を阻止してください。ベクターキャノン発射後は残敵の掃討になると思います。」

「了解した。5分だな。」

斑鳩隊長と簡単な打ち合わせの後僕はジェフティを移動させる。

まもなく作戦開始の合図があり、暫くして帝国軍の砲撃が始まると同時にジェフティを敵側面へ。

「ADA最大限に効果のあるポイントは。」

「マップに表示します。」

表示に従って移動する

「第一ポイントに到着しました。チャージを開始します。」

最大の効果を見込める場所は4つまず一つ目のポイントでチャージ

を開始する。

「チャージ完了、射線付近にいる機体は下がってください。」
広範囲に通信を送る。

同時にA D Aが各部隊に射線のデータを送る。

30秒待って射線付近に味方機がいなくなるのを確認し、

「ベクターキャノン発射！」

A D Aの計測どおりB E T Aの数を大幅に減らすことが出来た。

『効果を確認した、再度砲撃に入る。』

「A D A次のポイントを！」

一度ベクターキャノンで砲撃すれば先ほどまでの情報はないのと同じ、新たにA D Aにポイントの算出を頼む。

「マップに表示します。」

また4つほど表示される。

その中で早くたどり着けかつ最も効果の大きな場所をめざす。

ゼロシフトを使って移動しチャージを始める。

「チャージ完了」

それと同時にまた射線のデータを各部隊へ贈る。

「射線付近の部隊は下がってください。」

言うまでもなく動いてくれていたが、発射のタイミングを知らせる意味でも警告する。

各部隊が下がったのを確認し再び発射。

それをさらに3回くりかえし、かなりのB E T Aを殲滅できた。

「A D A、B E T Aの規模はどうなってる？」

「当初の予定以上に戦力を削っています。」

想定以上の効果があったらしい。

「掃討戦にうつる。」

僕が判断したと同時に、

『ジェフティ、掃討に移る、そちらも頼めるか？』

帝国軍もそう判断したか。

「了解です。」

その後1時間ほどでBETAの大部分を駆逐しBETAを大幅に後退させることに成功した。

さて、これで横浜にハイブは建造されなかった。

これから先はまだわからないが、暫くは時間の猶予が出来たはずだ。

『ジェフティ作戦終了だ。』

斯衛軍の指揮官から通信が入る。

『それと紅蓮大將からの伝言を伝えておく、“いい加減に謁見に応じろ”とのことだ。』

・・・京都防衛線のあとからずっと先延ばしにしてたからな。

「確かに承りました、では僕はこれで帰還します。」

『了解した。ご苦労だった。』

モニター越しに敬礼を返して帰還する。

紅蓮大將とは面識がある、祖父と知り合いだったことでたまに両親の研究を見にきたりしていた、そのときに知り合い、暫く武術を教えてもらったりした。

そのときに悠陽殿下の話だけは聞いている。

実際に逢ったことはなかったが、「将来君が守るべきお方だ。」と。

僕としては当初の目的はこの世界ではない世界の鑑純夏の願いをかなえること。

彼女と白銀武が生き延びることが出来た世界を作ることとそれをかなえようと僕は考えていた。

つまり僕が守ろうとしていたのは二人だった、日本でもないし地球でもないあの二人を守ることが目標で、そのためには何時かはBETAを地球から、そしてその影響範囲である太陽系から排除するぐらいのことはしなければならぬ。

それが僕のやることであり役目だと思っている。

そのために3つの願いでメタトロンが木星の衛星に存在する世界にしてもらった。

それを確保することも視野に入れて動かなければならない、そのためにまずもう1機のオービタルフレーム正確には3機になる、2機は無人制御のラプター、3機目はドロレス。

なぜかといえばエンダー号も作ってそれで木星に行きメタトロンを採掘してくるつもりだからだ。

そのために今エンダー号の設計もやっている、新エンダー号のほうでドロレスとリンクさせて航行のサポートしてもらえるように作るつもりだ。

問題は僕一人ではとてもではないが手が回らない、何せドロレスの教育まで僕がやっていては機体の完成や船の完成に支障が出る。

人材不足こそがもっとも大きな問題になっている。

今回の謁見はそう考えればいいタイミングともいえる、人材に関して殿下に頼んでみるのもいいだろう。

煌武院悠陽 side

やっと謁見に応じてくれると連絡があった。

小さいころに紅蓮に聞かされていた戦友の孫という少年の話。

その少年が京都、そしてつい先頃のBETAの東進を阻み関東を守護してくれた、紅蓮の言うとおり私の力になってくれるだろうか。

紅蓮の話では才気あふれる少年だったそうだが、小さいころに武術の指南を少ししたと聞いている。

剣術、紅蓮の流派“無限鬼道流”の基礎程度らしいが充分な才能を感じたといっていた。

「紅蓮、羽島洋人といいましたか、私の力になってくれるでしょうか。」

今ここには私を含めて3人いる。

紅蓮醍三郎斯衛大将、そして帝国技術廠・第壹開発局副部長巖谷榮二中佐の二人。

この二人にも今度の謁見には同席してもらう予定だ。

「ご心配には及びません、わしの目に狂いはないと断言しましょう、必ずや殿下の支えとなれる若者です。」

自信たつぷりに答えいる紅蓮、それを見ると少し安心できる。

「私としても興味のある少年ですね。日本の戦術機の性能を引き上げる要因である技術の開発者がまだ15歳とは。」

技術者として気になるのだろう、送られてきた機体のデータを見ながら楽しそうに言う。

「これが先代の政威大將軍が残してくれた遺産ということなんですよ。ね。」

私もデータを見せてもらったが今までの戦術機とは全く違うものといつていいと思う。

専門的なことまではわからないが仕様書のとおりだとすれば永久機関のようなものまで搭載している。

ここまでのものを作り上げることが出来る少年、羽島洋人これまで謁見には応じてくれなかったが何故だろう、そのことも聞いてみよう。

第2話 関東防衛線（後書き）

ご意見、ご指摘等たくさんいただきましてありがとうございます。
これからまたゆつくりですが更新していきますのでよろしく願います。

なんにしるご都合主義の話にはなりません。

第3話 謁見（前書き）

更新はさらに遅くなると思います。

第3話 謁見

洋人 side

謁見の日、国内外用の機体ファントマ？のデータなどを持って謁見のまで待っている。

ファントマ？のデータは国連や世界各地でBETAとの戦争の最前線となっている国々に優先して渡す。

帝国軍と斯衛軍にはファントマ？をはじめカリブルヌス、ドライツエン、ジャステイーンの設計データをすでに巖谷中佐に送っている。どう使うかはあちらの判断に任せるつもりだ。

暫く待っていると悠陽殿下と紅蓮大将、巖谷中佐が部屋に入ってきて対面に座る。

「お待ちさせていません。」

「いえ、初めてお目にかかります。羽島洋人です、紅蓮大将はお久しぶりです。」

殿下に続いて紅蓮大将に挨拶をしておく。

「うむ、元気そうだな、ずいぶんと活躍しておったようだな。」
笑みを浮かべて言う。

「全て機体の性能ゆえです、実際の僕の操縦技術はたいした物ではありませんから。」

言葉のとおり実際の僕の操縦技術はお粗末なものだと思う、ジェフティには耐G緩衝機構があるおかげでパイロットに対する負担が恐ろしく少ない。

最低限鍛えてはいるが僕が戦術機に乗ったらひどいことになるだろう。

たいした抵抗も出来ずに殺されて終わりだ。

「ご謙遜を、あれだけの活躍をしたあなたがたいしたことはないなと。」

微笑みながら悠陽殿下がこちらを見る。

「いえ、事実です。あの機体の性能ゆえのことです、これを。」
ジェフティの機体データを纏めたものを殿下に渡す。

「それを見ていただければ巖谷中佐にはご理解できると思います。」
悠陽殿下が中佐に渡す。

暫くそれを読み進めて、

「ここにあるのが本当ならたいして訓練を受けていないものでも戦果を期待できるな、ある程度の訓練はどうしたって必要だろうが衛士としての訓練の半分を削れるとっていいだろう。」

そのとおり、何も知らない少年ですら同じ性能を持つ機体に乗った本当の軍人相手に善戦できる、そういう機体がジェフティでありオービタルフレームだ。

「巖谷中佐の言うとおりです。訓練するに越したことはありませんが、事実としてたいした訓練もつんでいない自分でもこれだけの戦果を挙げられたというのが証明です。」

3人がそれぞれデータを確認し時折質問に答える、暫くそんなやり取りが続いたあと、こんどはLEVのデータを渡す。

「こちらは新機軸の戦術機として設計したものです。それぞれ現行の不知火とほぼ同じだけの性能を持っていると思います。そして、これらの技術は戦術機に転用も可能です。」

僕はそういつて、転用できそうな技術を纏めたものを渡す。

具体的にはジャステーンに装備されているエネルギーブレード、ドライツェンのロングレンジライフル、カリブルヌスのビームキャノンなどの兵装、そしてそれらを可能とするジェネレーターやOSなどだ。

「これだけのものを君が？」

巖谷中佐も驚いている、父からある程度報告は聞いていただろうと思うが信じられないところもあっただろう。

「当然僕一人で造ったわけではありません研究機関スタッフ全員で開発したものです。」

当たり前だが僕は最初概念を作ったに過ぎない。

最後に用意していた開発中の機体のデータを見せる、これはオービタルフレームに近いLEVであるビクバイパーだ。

「今開発中の機体でもうすぐテスト用の機体が仕上がります。この機体は今までのものとかかなり違うので出来ればテストを行いたいです。」

何せ可変機構を備えた機体など新機軸にもほどがあるだろう、戦闘機に乗っていた人であればと思うがそんな人はもういない。

「ちよつと待ってください、あなたの変わりにジェフティを使う人間がいるとはどういうことでしょう？」

煌武院悠陽 side

やつと謁見の準備が整い羽島大尉に会うことになった。

途中までは彼の開発した機体やそのデータを見てそれに関して質問したりして、正直頼りになる印象を受けていた。

きっと私の力になってくれると紅蓮が保証してくれていたのが納得できる人物だった。

「これからさらに開発を進めるにあたって何人かのスタッフを帝国軍の中や一般の人間からスカウトしたいと考えています。その許可をいただけませんか？」

「人材が必要であると？」

「そうですね少なくとも4人、一人は僕に変わってジェフティを使う人間、もう一人は次の機体の開発の助手を頼もうと思っている人、そして新たに設計しているこの戦術機のテストパイロットに二人計四人です。」

なので少し驚いた変わりにジェフティに乗る、つまり彼はもう乗らないということ？

「今開発中の機体でもうすぐテスト用の機体が仕上がります。この機体は今までのものとかかなり違うので出来ればテストを行いたいです。」

私を考え込んでいる間に少し話が進んでいた。

「ちよつと待つてください、あなたの変わりにジェフティを使う人間がいるとはどういうことでしょうか？」

あわててそう尋ねる。

もしや怪我でもしたのだろうか、機体がいくら高性能でも今までほとんど単独で戦ってきたのだ、無理もあつたのだろうか。

「僕が戦えなくなるからです、というのも今現在あるメタトロンの量ではあと数機ジェフティのような機体を作る分しかないんです。それを採掘しにいかうと考えています。」

怪我などではないようでひとまずは安心した。

しかし採掘に行くというがそもそもどこにあるのだろうか、資料によればメタトロンというのは地球上に存在しない鉱物だであった。

「採掘ということはどこにあるのかがわかつているのですか？」

「木星の衛星にあると思います。」

木星・・・？

「木星とは火星のさらに向こうの星の、木星ですか？」

信じられない、というかそこまで行って帰ってくるのにどれだけの時間がかかるか、現実的ではないしそこにあるとどうしてわかるのでしょうか？ずいぶん自信があるようですし。

「その通りです、祖父が残していたデータ等から検証してかなり高い確率で木星の衛星にあるとおもわれます。もちろんそこまでいつて変えるための移動手段も考えています。」

しかし、宇宙に出るといことになる、今の技術力でそこまでいけるのだろうか？

「本当に方法があるのですか？正直あまりに遠い、とても行って帰って来れるとは思えないのですが。」

疑いたくはないのですがさすがに・・・。

「そうですね、まあもう少し先の話ではありますがそのために新たに1機、サポート用の機体と共に宇宙船の建造も行います、また、惑星間移動のためのシステム自体はすでに存在します。」

すでに移動手段は確保できていると？

「どのような方法でしょうか？」

「ジェフティに装備されているシステムにゼロシフトというものがありますが、それを宇宙船で行うということです。宇宙船そのものに搭載するのではなく外部装置として施設を建造し予定では地球から木星まで行つて帰るのに3ヶ月ほど考えています。」

3ヶ月で行つて帰つてこれると？本当にそんなことが可能なんでしょうか。

「本当に無事に戻れますか？あなたを失うことは帝国にとって大きな損失です、安全が確保されるのなら許可も出せますが。」

100%は無理でもある程度の安全を確保してもらわなければ許可は出せません。

「もちろんです、それに今すぐではありません、これから準備を進めて2年ほどはかかるでしょう。」

「では2年の間に安全性を確保してください、2年後にある程度以上の安全性が確保できなければ許可できません、そのための開発に必要であれば人材のスカウトは許可します、ただし本人との交渉はあなたにお願いできますか？」

正直私や紅蓮が命令すれば早いのでしょうか、彼の研究は本当に信頼できる者以外にはもらすことすら出来ません、そうなると彼個人から説得してもらつたほうが情報は漏れずにすみます。

「もちろんです、その許可をいただけるなら交渉は僕が行います。自信があるのですね、

「では許可します、私の名を使ってかまいませんので頑張ってください。」

私の名を出せば少なくとも無下には出来ないでしょう、今の私で手伝えることはこの程度で申し訳ないですが。

「では許可します、私の名を使ってかまいませんので頑張ってください。」

悠陽殿下からの許可を得たか、ふむ。

「羽島大尉私のほうからも一人人材を紹介したいのだが。」

話してみた感想は好感が持てるし彼の研究開発には優秀な人材は必要になるはずだ、唯依ちゃんなら充分能力も高いし問題ないはずだ。私が勝手に進めると怒るだろうとは思うけど、正直実戦部隊にいられるよりは安心できる。

「紹介といいますと第壹開発局の方でしょうか？」
開発局に所属しているわけではない。

「いや私の知り合いで優秀な衛士であることは保障する、現在の所属は白き牙中隊ホワイトファングに所属しているが私から話しておくから一度あってみてくれるか？」

「はあ、わかりました。」

不思議そうな顔をしている、まあ当然だいきなり人を紹介するといわれても困るだろう、彼自身で人材は独自に探していたようだし。優秀さは保障するから、近いうちに紹介するよ。」

謁見も終わりに改めて唯依ちゃんを呼び出す。

まもなくして、

「篁中尉入ります。」

唯依ちゃんが入ってきた。

「ご苦労様、すまないね忙しいときに。」

「いえ、どういったご用件でしょうか。」

相変わらず堅苦しいな、昔はおじ様さんと呼んでくれたものだけど。「政威大將軍直属の研究機関のことは知っているね。」

もうほとんどの帝国軍の衛士は知っていると思う、なにせBETAを退けるほどの武装を開発した部隊だ、おかげで悠陽殿下の発言力もだいぶ高くなった。

「ジェフティでしたか、あの機体を作った研究開発機関のことです

ね。」

帝国軍内ではすでにかなり有名になっているようだ。

「そうだ、君にそこに行ってもらいたい。」

「?どういうことですか?!部隊は?!」

「落ち着いて、今あの研究機関の主任は人材を探しているんだ、それも信用できなおかつ優秀でなければならぬ、当然この国の未来にも関わることになる。」

おとなしく聞いてくれている、興味もあつたんだろう。

「そういう人材は少ないからね、私のほうから紹介しておいた。」

「そんな勝手な・・・。」

ため息をついてつぶやく。

「まあ、一度あつてみるくらいいいだろう?話はそれからでもいいから。」

「わかりました。」

何とか納得してくれたようだ。

これで、本音を言ったら怒られるんだろうけど、実戦部隊よりは安全だろうし少し安心できるな。

あれから数日私は唯依ちゃんを連れて研究施設をかねているという船にきた。

ここには入るだけでもかなり苦労する、考えうるあらゆるセキュリティを使用して情報の漏洩を防ぐためのらしいが、入るだけでも3時間近くかかるのは何とかならんものか。

「この船が・・・。」

唯依ちゃんはかなり驚いているようだ、まあかなり大きな船だしね大型のタンカー2隻を横に並べて間を橋でつないだような構造になっているのだが、片方でメタトロン研究もう片方で戦術機の建造が可能になっている。

まあさすがに大量生産は出来ないがテスト用の機体を作る程度のこととはできる施設になっているらしい。

「ようこそ巖谷中佐、そちらの方が？」

主任でもある羽島大尉が出迎えてくれた。

「ああ、篁唯依中尉だ、中尉こちらがメタトロン研究機関の現主任羽島洋人大尉だ。」

「はじめまして、篁唯依です、お噂は聞いております。」

敬礼して答える唯依ちゃん。

「ああ、これはどうも羽島洋人です。」

羽島大尉に招き入れられます研究施設のほうを案内してもらう、ここに入るのは2度目だ前は彼の父親に案内されてだが。

「海道君は？」

彼とは同期でもあるので聞いてみた。

「父さんはあそこでウーレンベックカタパルトの調整作業中です。」
指し示されたほうを見ると端末の前で作業中だった。

「そのウーレンベックカタパルトとは何でしょうか？」

「簡単に言えば亜光速での移動を可能にするシステムです、まだ実用段階ではありませんがあれの開発も急務ですからね。」

そうかこれが移動手段といていた装置なのか。

「開発はどの程度進んでいるんだい？」

「そうですね、まだまだはじめばかりですし全体で言えば一割にもなっていないですね、ただ、ジェフティでシステムそのものの実証実験はすんでいるとっていいので大型の船舶等で可能なようにシステムを改良してそこまでいければあとは早いですよ。」

なるほど、データにあったゼロシフトを大型化するということが。

「何のためにそんなものを？」

唯依ちゃんにはまだ話してないからわからないか。

「巖谷中佐から聞いていませんか？」

唯依ちゃんが非難の目で見ている。

「このメタトロンという鉱物を採りに行くためです。」

「そんなシステムまで作らなければいけないところなんですか？」

不思議そうに尋ねるが、唯依ちゃんはこのメタトロンが地球上にあ

ると思っっているんだな。

「採掘できるのはおそらく木星の衛星カリストですから、こういったシステムを使用しなければ何年もかかってしまいますから。」
それを聞いて唯依ちゃんが啞然としている。

「もくせい？・・・木星ですか！？」

篁唯依 side

おじ様に連れられて研究施設にやってきたが、まずその施設に驚かされた。

タンカー2隻分の大きさの船、そしてセキュリティの厳しさ。さすがに政威大將軍直屬といわれるだけあってかなり大掛かりなものだ。

だが、それ以上に驚かされたのは、

「採掘できるのはおそらく木星の衛星カリストですから、こういったシステムを使用しなければ何年もかかってしまいますから。」

という言葉だ、他の星まで行かなければメタトロン鉱石は採掘できないそうだ。

「祖父のデータなどから検証した結果可能性が最も高いのは木星の衛星なんです、これから先のことを考えればメタトロンの採掘は必要になります。」

これから先とはBETAとの戦争にジェフティのような機体がまだ必要ということだろうか？

「BETAを駆逐したら何もかも終わるわけではありませんから、何より地球は全体的に被害を受けています、被害のない国はわずかなもの、仮にBETAとの戦争が終わったときに力を持っているのは被害の少ない国になります。」

BETAを駆逐したあと、私より年下だと思っただけで私より先の世界を見ている。

「そうなったときに対抗するためには他国にない技術を持っている

必要があります、何よりアメリカに対抗できる力を日本だけではなく世界が持つている必要がある、でなければアメリカがG弾で世界を牛耳るということになりかねません。」

「ずいぶんと警戒しているんですね、確かに危惧される場所は理解できますけど。」

今の世界でそこまで考えているだろうか、アメリカにだっていつBETAが攻め込むかわからないというのに。

「アメリカという国がどういことをする国か、以前の佐渡島のとくに知りました。」

そうだった、あの国は他国に核だのG弾だのを大量に落としてでも殲滅することを優先する、あぐく思い通りにならないからと撤退するよな国だった。

「納得できました。他国に対して優位に立てるものが必要だからですか。」

「そうです、次に行きましょうか。」

そういつて次はジェフティの格納庫に案内してくれた。

そこには関東防衛線のときに見たジェフティとその隣にもう1機似た機体がある。

「驚いた、もう1機あったのか。」

「いえこれはまだ建造途中で外見だけです、中身、それも最も重要な部分がまだなんです。」

新型をすでに建造中だとは驚いた。

この機体の開発に携われるのだろうか？

「この機体に搭載するAIの開発が遅れていまして、そのためにも何人かの人員のスカウトが必要なんですが。」

「私がここに来た場合はこの機体の開発に携われるのでしょうか？」
気になる、最新鋭の機体というだけでも興味があるし、あのジェフティの同系機。

「そうですね、篁中尉にも手伝ってもらおうと思います。」

「では、よろしく願います。」

即決した、それにこの人も信用していいと思う、なによりBETAを殲滅したあとの世界を考える、私には出来なかったことを彼は当たり前前に考えている。

尊敬できると思ったし、私で支えられるのなら、力になれるのなら力になりたいと思えた。

第3話 謁見（後書き）

次の話では武と純夏のスカウトと、沙霧大尉たちもスカウトしよう
と思います。

第4話 スカウト（前書き）

こんな感じになりました。

やっぱりご都合主義、これでは説得されない気がするけど、その辺はスルーしてくださいとありがたいです。

第4話 スカウト

洋人 side

今僕は篁中尉と共に白銀武のいる帝国軍衛士訓練校に來ている。

「羽島大尉、どうして総戦技評価演習も終わってない少年をスカウトするんですか？」

今の白銀武は訓練兵になって日が浅く訓練自体も始まったばかりの状態だ、当然戦術機に乗った経験はない。

篁中尉の言うことはもっともだが、ジェフティに乗るならむしろ戦術機の訓練を受けていないほうが慣れるのが早いだろうということ、そして機動兵器への適正は僕以上にあるだろうという予測があったからだ。

「ジェフティのデータは見ましたよね？あの機体は既存の戦術機とは全く違った兵器と言っている、操縦する感覚もかなり違うんです。」

「そういうとすぐに察したのだろう、」

「つまり戦術機の癖をつける前にジェフティでの訓練をしたほうがいいと？しかしジェフティはあなたの機体なのでは？」

それでもまだ納得は出来ないようだ。

「僕の機体というわけではありませんよ、それに僕はジェフティに乗せてもらっているだけでその性能を充分には活かせていないんです。」

実際ジェフティの操縦の際ほとんどの武装の制御をADAに任せていて、僕がやっているのは機体の制御とトリガーを引くことくらいで照準などもほとんどお任せでやっている。

BETA相手だからこれで何とかなるが、対人戦でもやればすぐにわかることだが条件が同じなら誰とやっても勝つことは出来ないだろう。

せいぜいいい勝負ができるくらい、だが白銀武は“あの”白銀武で

はないとはいえ同じ白銀武でもある。

「性能を活かせていないって、あれだけの戦果を挙げているんですよ？」

「逆に言えば才能のない僕でもあれだけのことが出来る機体です、ジェフティ専門で訓練を行えばより大きな戦果が期待できると思いますませんか？」

「しかしあなた以外にあの機体を操れるものがいるとも思えません、あなたのほうがあの機体に関しては詳しいですね。」

しぶしぶといった感じで認めてくれた、何が気に入らないのか良くわからないが。

そうして暫くすると目的の人物がやってきた。

「失礼します、訓練兵の白銀武です、俺に用というのは何でしょうか？」

「ああ、はじめましてメタトロン研究機関主任の羽島洋人大尉です。」

「同じく大尉の補佐をしている篁唯依中尉です。」

篁中尉が少し不機嫌そうに言う、礼儀がなっていないとか考えてるんだろう。

それを聞いた白銀も僕たちの階級に驚いている。

「あの研究機関の人が、自分にどのようなご用件でしょうか。」
姿勢をただし言葉遣いも改めた。

白銀武 side

なんだろうこの状況は、いまや帝国内で知らないものはいないであろう人物、そのくせ情報はとことん秘匿されている人物、それが俺とたいして年の変わらない男で補佐といっている女性も中尉だというが俺とそんなに変わらないだろう。

その二人が俺に用があるといっってわざわざ衛士訓練校まで尋ねてきた。

何か迷惑でもかけたか？あるわけない、ほとんど雲の上の人物だまさか俺と同じ年くらいの少年が訓練やらすつ飛ばしてジェフティなんていう最新鋭の兵器を作ったうえに戦っているなんてまるでヒーローだ。

「あの研究機関の人が、自分にどのようなご用件でしょうか。」

とりあえず階級は遥かにうえ姿勢を正して礼儀正しくしておこう、いまさらなきもするけど。

「単刀直入に言うけど君にジェフティの専属衛士になってもらいたい。」

「？今なんと？」

「せんぞく？ジェフティってあの、京都や関東防衛戦であなたが乗っていた？」

何で俺にそんな話がくるんだ？そもそも戦術機適正すらまだわからないのに。

「そう、簡単に説明するとまだ戦術機に乗っていない段階のほうが機体に慣れるのが早いだろうということと、まあ僕の勘みたいなので君なら僕以上に使えると思ったから。」

何を持ってそう判断したんだ？

「まあ、当然他にも何人か候補はいるんだけど、たとえば篁中尉もそうだけど僕としては君に期待していると思ってくれ、でどうだろう来る気はある？もし来るとしても訓練はあるけどね、通常の衛士の訓練とはかなり変わることになる。」

「より過酷とかですか？」

正直今の訓練でも結構きついなんて思っている俺としては迷う、着いていけないわけではないがしかし、あの機体に乗れるあれで国を守る、関東防衛戦の活躍を教官たちから聞いているだけに乗ってみたいというのはすごくある。

「ある意味では過酷だろうね、君が受けてくれるならこれから1年以内に僕以上にあの機体を手足以上に操れるようになってもらう、まあ訓練が厳しいのはどこに行っても同じだ、ただ覚悟はしてもら

ったほうがいいな。」

「覚悟ですか？」

何の覚悟だろう、死ぬほどの訓練とか？

「人類を救う覚悟かな。」

人類を救う覚悟？

「どういう意味だ？」

思わず素で言った、篁中尉の目つきが怖くなった。

「ジェフティに乗るなら英雄になる覚悟がいる、失敗なんてひとつとして許されない、常に勝利しか求められない。」

常勝無敗の覚悟、世界中からそれ以外の結果を認められない。

「まあそれが出来る機体だし当然君一人に背負わせようというわけじゃないけど、そのくらいの覚悟を持ってきてほしい。」

重い覚悟だ、訓練を始めたばかりの雛にもなっていない俺にそれを求めている、冗談ではなく真剣に言っているのはわかる。

正直なんでそこまで俺に期待するのかわからない、これまでの功績から考えて自分一人でやってきた、それこそ英雄のような人間が何も功績のない俺のどこに可能性を見出しているのか、

「俺でいいんですか？もつと優秀な衛士はたくさんいると思います
が。」

「確かに優秀な衛士はいるけど色々と思惑もあるんだ、君を英雄に仕立て上げて日本という国の国連での発言力を上げること、何より悠陽殿下の復権のためにも直属の部隊に英雄がいることが望ましい。」

英雄になること前提で話してないか？

「なんか英雄になることは決まっているみたいですね。」

「当然、ジェフティを使つて負けはない、なら英雄になることは決定しているも同然。」

すごい自信だな、

「それこそ、自分で英雄になればいいんじゃない？」

「僕には他にやる事があってねそのためにここで戦える人が必要

なんだ。」

それからメタトロンのこと、その採掘のために必要な準備、そして木星まで行かなければそれが存在しないことなどを説明してくれた。木星まで行って帰ってくるのが出来るのかということに関しては問題はないらしい。

「つまり羽島大尉が戻るまで代わりに戦うって事ですか？」

「代わりというのは違う、さっきも言ったけど君一人に背負わせるわけじゃない、実際に英雄になるのは君も含めてメタトロン研究機関でつくる政威大將軍直属の特殊部隊ということになるね。」

「大体理解できました。どういうわけか俺のことを買ってくれてくれるし、俺で役に立てるならよろしく願います。」

なんにしても俺にとって悪い話なんてない、英雄になるのだってむしろ望むところだ。

BETAを殲滅できるならなんだってやる、その覚悟は当に出来ている。

まして生存率の高い機体に乗せてもらえるなんてありがたいとしか言いようがない。

「そうか、じゃあ言葉遣いは普通でいいよ、歳も変わらないし、堅苦しいのは苦手だし。」

それはありがたい、ちょっと話しくかったんだ。

「それはありがたいな、正直俺も堅苦しいのは嫌だ。」

笑って握手をする。

「えっと、篁中尉もよろしく願います。」

隣の篁中尉はなにやら不機嫌そうだった。

「一応大尉が認められたのであればかまいませんが、公の場では言葉遣いに気をつけなさい、本来なら許されないことなんだから。」

この人の前ではきちつとしておいたほうがいいようだ、ちよつと怖い。

「さて、実はひとつ頼みたいことがあるんだよ、白銀君に。」
？頼みごとねえ。

「なんだ？出来ることなら協力するけど。」

そのあとに出た言葉は驚きを通り越してあきれた。

「鑑純夏さんのスカウトを手伝ってほしいんだ。」

いい笑顔で何を言ってるんだ？あいつに何をさせようというのか、正直わからない。

「えっと、俺の幼馴染の鑑純夏？」

「スカウトといっても君とは違う理由だけだね。」

羽島大尉はA Iの育成係として純夏をスカウトしたいと言う、あいつにそんなことできるのか？

結局俺も一緒に純夏のところへ行くことになった。

鑑純夏 side

びつくりした、いきなりタケルちゃんと帝国軍の研究機関の人が二人家に来たと思ったら私をスカウトに来たという。

私は自分で言うのもなんだけどそんなに優秀じゃないよ？

ちよっと悲しくなるけど、タケルちゃんが言うには政威大將軍直属の機関の人で、ニースにもなっていたあの関東防衛戦や京都防衛線で活躍した部隊だそうだ。

羽島洋人大尉と篁唯依中尉、二人とも私と歳は変わらないと思うんだけど、すごいなあ。

「えっと、私に何が出来るんでしょう？」

こんな人たちに囲まれて仕事をする私、・・・想像できない。

「あなたにやってほしいことはA Iの育成です。」

何それ、そんなことできるわけない。

「私には無理ですよそんなこと。」

冗談か何かだろうと思って言った。

「純夏冗談じゃないらしいぞ、俺も説明を聞いたけど本気でこの人はお前をスカウトに来てる。」

タケルちゃんまで、・・・本気で言ってる？

「難しく考えないで、AIの育成といっても、基本のシステムなんかは私たちが作るの。」

篁さんが笑いかけながら説明してくれた。
要約すると保母さんをするということらしい。

完成したAIは赤ちゃんみたいなので、その子供にいろんなことを教える仕事で軍事的なことは篁さんや他の軍の人でもいいけどそうじゃない、もっと人としての大切なことを教えてあげてほしいといわれた。

それにしたって、どうして私なんだろう。

「私は、人に物を教えられるような優秀な人間じゃないですよ。」
言ってて悲しいけど、事実だし。

「俺もそう思うんだけどな。」
タケルちゃんが言うことじゃないよ！あとでドリルミルキパンチだね。

「純夏さん、何も専門知識を与えてほしいといっているのではないんです。たとえばあなたの趣味とか好きな本、歌、そういった普通のことを教えてほしいんです。」

羽島さんが言った、まんま保母さんの仕事だな。

「子供の世話をするのだと思ってくだされば間違いではありません。」

「うーん、でもこの話を受ければタケルちゃんと一緒に職場ってことになるのかな。」

「もちろん、彼もメタトロン研究機関に所属してもらうことになりますから、そのためでもあります。」

？タケルちゃんのため？タケルちゃんも不思議そうな顔してる。

「知り合いがいるほうが仕事もしやすいかと思ひまして、スカウトする対象はそういった繋がりのある人を纏めてスカウトしているんです。」

「じゃあ、私たちのほかにもそういう人がいるんですか？」

「いえ、今はまだいませんが、これからスカウトしていく人たちは

大体そうですね。」

スカウト第一号なんだ。

「どうでしょうか？ 仮にですがこれから衛士になるにしても白銀君と同じところに配属される可能性というのは低いですから、あなたも知り合いがいるほうが安心できませんか？」

羽島さんの言うとおりだけど、

「えっと、本当に私優秀じゃないですよ？」

だんだん悲しさが増してくるよ。

「それは、あなたの判断ですよ、あなたが優秀であるか否かそれは僕たちが判断することですよ、それに僕としては期待していいと思っています、もしだめでもあなたの責任ではありません。」

羽島さんも篁さんもそういつてくれるし、

「お前が衛士訓練校に行ってもついてくのでやっとならうし、こっちのほうが向いてるかもしれないぞ。」

タケルちゃんも進めてくれる、うん、やってみてから考えよう。

「じゃあ、私でよければお願いします。」

こうして、私とタケルちゃんはメタトロン研究機関の一員になった。あとでびつくりしたけど階級はいきなり少尉で、タケルちゃんは中尉になっていた。

洋人 side

さて、白銀武と鑑純夏のスカウトの翌日、僕は朝霧駐屯地に沙霧大尉のスカウトに来た。

彼と副官の駒木中尉をはじめとした何人かをメタトロン研究機関直属試験小隊にヘッドハントするわけだ。

そして現在その交渉の最中、ちなみに今回は僕だけで来ている。

彩峰中将のことで、国内に対して思うところがあるであろう人物だけにこの時期からすでにクーデターを考えているかもしれない、そう考えて僕一人で交渉に来た。

「つまり私と部隊を丸ごと試験小隊に編入すると？」

「もちろんそちらの意思を尊重はしますが、考えてもらえませんか？」

部隊のこと、研究機関のことはつたえてある。

「それと、殿下からの伝言を預かっています。」

そして殿下が彩峰中將に対して申し訳なく思っていること、出来れば彼の名誉を取り戻したいと考えていることもこの交渉に来る前に確認を取った。

「最善を尽くして彼の名誉を守ることくらいしか今の私にはできない、そのことを許してほしい。そして出来ることなら私に力を貸してほしい。」

殿下からの伝言を伝えて暫く静かに待つ。

殿下からの言葉があるとはいえそう簡単にはいかないだろう。

「君は先の彩峰中將の光州作戦のことを知っているのか？」

「はい、ついですからこれもお渡ししておきます。」

今渡した資料は僕が独自に出来る範囲で調べた光州作戦の被害報告、そして現地住民からの聴取資料等を纏めたもの、ちなみにこれは本当に僕の独自調査の資料で国連や各国に対してファントマ？以外の機体のデータ提供の際についてに渡そうと思っている。

まあ、ちょっとした脅迫のつもりだ。

無論この資料の全てが正しいとは言いつれないが、それでも光州作戦において国連軍が陥落した理由は彩峰中將のみの責任にはならないし中將の判断は人道的に正しいことを証明できる。

「この資料は君が？」

「僕が独自に調査したものです、100%正しいとは言いつれませんがこの資料と僕の開発した機体のデータとで僕は国連を脅迫しようと考えています。」

「な？！何を考えているんだ？脅迫とは。」

「ぼくは、開発した機体のデータをみせ、

「これは国連にはまだ渡していない機体のデータです、これを各国

に対して開示する前に彩峰中將に関する資料を送りつけて正式に抗議しようと考えています。」

罪を取り消せとは言わない、あの光州作戦において彩峰中將に非がないかといえば違う、ただし、彼一人の責任では決してないということ、それを国連に認めさせる。

その上で国内外に対して中將に救われたという人々の証言も開示する。

「彩峰中將の名誉を完全に取り戻すことは不可能です、そして彼に何の責任もないとは僕は思っていません。しかし彼一人に責任を押し付けた国連のやり方に対して抗議する意味もこめてちよつとした脅迫です。」

につこり笑って言うと言と沙霧大尉はあきれた顔をして、

「恐ろしい少年だな君は。」

というと言い出した。

「わかった、君は私以上に世界が見えているのだろうな、部隊の編入は了承しよう、連れて行く部下に関しては何か注文はあるか？」

驚いた、正直この一回目の交渉で了承してもらえとは思っていなかったが、どうやら渡した機体のデータが思いのほか高性能だったので乗ってみたいというのもあったようだ。

「部隊の人員に関してはあなたが確実に信頼できる人員のみで10人程度にしてください。あまり機体の数を用意できないのと秘匿のためです。」

「了解した、人員に関しては明日にでも纏めてデータを送る、これからよろしく頼む。」

「こちらこそ、色々と頼みたいこともありますのでよろしく願います。」

これで前準備は終わったといっていだろう、これからは白銀君の訓練と機体の開発そしてエンダー号の建造とウーレンベックカタパルトの実用化。

このペースならもう少し予定を繰り上げられそうだ。

第4話 スカウト（後書き）

最近ふと思ったんですが、この世界では犬や猫ってどうなってるんでしょう？

全く関係ない話ですけどね。

第5話 訓練中（前書き）

久しぶりに投稿できた、これからも不定期になるとは思いますが、読んでいただければ幸いです。

第5話 訓練中

沙霧尚哉 side

あの日から1週間ほどで、私たちはメタトロン研究機関所属の試験小隊となった。

着任初日に3人の人物を紹介された、篁唯依中尉、白銀武中尉、鑑純夏少尉の3人。

篁中尉の名前は聞いたことがあったが、他の二人は知らなかった、しかし彼が自らスカウトしたほどの人材、何かあるのだろうと思う。

「どうした、その程度か白銀少尉。」

今私は彼の教官を任されているのだが、まさか訓練を受け始めたばかりの素人だとは思っていなかった。

シミュレーターを使って彼はジェフティのデータで私は機体が完成次第私の引き連れてきた部隊でテストすることになる新型のデータビックバイパーで模擬戦をしているのだが、

「うお、何だ！この！」

ずいぶんと苦戦しているようだ。

ジェフティやビックバイパーの操作性は既存の戦術機や彼の開発してきたファントマ？に代表される機体とは全く別物だ、私もこの機体の操作性と性能にはただ驚くばかりで、慣れるのにも時間がかかった。

なにより、この浮遊感に慣れるまでなんと頼りなく感じるのだが、慣れてくるとむしろ空中ですら自在に機動性能を発揮できるこの機体は真実思ったとおりに動かせる、ジェフティはこれ以上の性能を

持っているのだが。

今のところ戦績は10戦10勝、まあ教官役なのだからそう簡単に負けるわけにもいかんのだが。

「ほら、もつと周囲に気を配れ、また後ろを取ったぞ。」

急いで後ろを向こうとしているが回りすぎだ。

はじめに羽島大尉とも模擬戦をやったのだがさすがに慣れているのだろう、今の彼のようにくると回ったりはしなかったな、大尉は自分に衛士として起動兵器を操る才能はないと考えているようだが外から見ればあれだけの3次元機動を可能とする空間把握能力は立派に才能だと思った。

白銀少尉は彼とは違う才能を持っていると感じる、まだ訓練を始めただばかりだが、一戦ごとに何かを掴んでいるというのがわかる、少しずつ機体も制御しきれるようになってきている。

どちらの機体にも言えることだが、シミュレーター上でもあるので独立型戦闘支援ユニットのサポートはなしで行っている。

これは羽島大尉が私たちに対しても暫くは無しで訓練してくれといっていた。

それが有る無しで機体の性能すら変わるといつていたが、この状態でかなりの性能があるとわかる、それだけにこれ以上の性能になるとは思えないが。

考えながら再び後ろを取る。

「これで終わりだ白銀少尉！」

「げ！また後ろ?!」

これで11戦11勝か。

だいぶ動きは良くなってきているのだが、ジェフティの高起動を制

御するには何度もやって体で覚えるしかない。

白銀武 side

今日も沙霧大尉に模擬戦の相手をしてもらっている。

まだ模擬戦と言っていいレベルにもなっていないけど、というのもののジェフティの性能のせいだ、というか俺の腕のせいだけだ。

初めて動かしたときはかなり無様なことになった、シミュレーターで助かったと本気で思った。

なんとも動かしづらい機体だと感じた、なんというか、そう！ふわふわしてるんだ。

戦術機に乗ったこともないし分からないけど沙霧大尉が言うには『全く感覚が違う』そうだ。

だが、感覚が違って乗りなれていない沙霧大尉にも全く相手にされてない、訓練を受けていなかったとはいえ期待してスカウトしたはずだ、何とかこいつを操れるようになりたいと思ってやっている。

「これで終わりだ白銀少尉！」

「げ！また後ろ?!」

まあ、また負けたけど。

しかし全く手も足も出ずにこれで11敗、

「タケルちゃんまた負けたんだ。」

《そのようですね純夏さん。》

二人分の声が聞こえた、一人は鑑純夏、俺の幼馴染で今は洋人の仕事の補佐をしているらしい、あれを補佐というのかは知らないけど、

そしてもう一人の声は正確には一人ではないAIであり、今開発しているジェフティの同系機ドロレスの声だ。

純夏の仕事はそのドロレスの先生だ、勉強とかではなく普通のこと、たとえば泥棒はいけませんみたいなことを話してい聞かせること、そしてドロレスの質問に自分なりに答えること。

仕事か？

「これで11敗だね、タケルちゃん。」

なんか楽しそうに言ってくる、

「うるさい、お前も乗ってみれば分かる、そんな簡単に沙霧大尉に勝てるわけないだろ！」

「そうだな、私も簡単に負けるわけにもいかないからな、手は抜かん。」

少し楽しそうに沙霧大尉が言う。
見守る目で見ないでほしい、

《でもお兄様には二人とも勝ってないですよね。》

ドロレスが嬉しそうに言う、ドロレスは羽島洋人至上主義みたいなところがある。

基本的な教育は篁中尉が行ったと聞いたから一度そのことを尋ねたことがあるが何故か分からないがいつの間にか洋人のことをお兄様と呼ぶようになっていたらしい。

あの人もそういう教育をするようには見えないから何があったのだろうか？

ドロレスに聞いても、

《お兄様はお兄様です、そう呼んでいいかもちゃんと聞きました。》
と自信満々に答えていたので本人に聞くと、

「突然お兄様と呼んでいいかと聞いてきたから許可したけど、そういえば何でだろうね？」

と首をかしげていた、なぞの多いAIだな。

「ドロレス、羽島大尉と比べちゃだめだよ、沙霧大尉たちよりも前から乗ってて実戦にも出てるんだよ？なのにその大尉より扱いが上手なわけないじゃない。」

《それもそうですね。》

結構傷つくぞ、沙霧大尉も微妙な顔だ、まあ事実だから仕方ないのだが、

「純夏、せめて聞こえないところで話せよ。」

「うえ！？聞こえてたの？」

《通信は繋がってますよ純夏さん。》

こともなげにドロレスが言う、どうやら聞こえてないと思っていたらしい。

「あとで覚えてろよ純夏。」

「い、いやだなあ冗談だよ、ちょっとした冗談だって、アハハ・・・」

「そうか冗談か、ハハハハ。」

「表情が笑ってないよタケルちゃん。」

あとで覚えてろ、シミュレーターを出てＡＩの開発室に向かいながらどうしてやるうかと考える。

「白銀少尉、ほどほどで休んでおけよ。」

苦笑しながら沙霧大尉に見送られた。

篁唯依 side

ドロレスと鑑少尉は白銀少尉と沙霧大尉のシミュレーターでの訓練を眺めながら、

「あれがタケルちゃん、もう一人は沙霧尚哉大尉だね、あ、また負けた。」

少し残念そうにドロレスに説明している、微笑ましいというかつい笑ってしまう。

ドロレスと鑑少尉はまるで姉妹のように仲がいいと思う。

ドロレスは私に対してはもう少し硬い感じで受け答えをする、緊張している感じだろうか。

そういうことから羽島大尉の判断が正しいと分かる、おそらく私ではあはいかない、緊張させたままになる、それでは柔軟な発想の出来ない、いわばＡＤＡのような純粋に戦闘支援システムとして

は優秀なAIになるだろう、しかしドロレスに求められているのはより人に近い判断だということだった。

現在このAI開発室では二つのAIの育成をしている。

ひとつはドロレス、もうひとつは羽島大尉が担当していて名称はDELPHI、こちらはドロレスとは用途が違うといった、そこらは私も鑑少尉も関わっていない。

「ど、どうしよう、怒っちゃったかな？」

《大丈夫ですよ、武さんは優しい方ですよ？》

ふと気づけばドロレスに鑑少尉が慰められていた。

おかしな光景だが、こんな反応を示すのはドロレスだけでADAやDELPHI、ビックバイパーに搭載されている戦闘支援ユニットはここまで感情豊かではない。

正直、ここまで人に近い反応を示す必要はあるのか疑問ではあるが、

「二人ともそろそろ時間ですよ。」

《模擬戦の時間ですね。》

「がんばってね、ドロレス。」

ドロレスは現在の状態ではほぼ完成しているので、徐々に戦闘支援ユニットとしての訓練も始められている。

人としての判断に重きを置いたための弊害というほどでもないが、ドロレスはADAほど戦闘に関しては優秀ではない、何せ状況の変化に慌ててしまい正常な戦況判断が出来ずに模擬戦で落とされたりする。

かと思えば、思いもよらない提案をしてきたりして、相手と共にこ

ちらもかく乱してしまう。

シミュレーターでの訓練での戦績は沙霧大尉相手に10戦中4勝と良いほうだと思う。

沙霧大尉のほうは戦闘支援ユニット無しの状態でかなりハンデがあるが、今回はドロレスのあるシステムのテストも兼ねた模擬戦を予定している。

マスコントロールシステム、複数の無人機を制御するシステムでありドロレスに搭載される最大の武器でもある。

現在無人機であるラプターを建造中で今は羽島大尉はそちらにかかっている、ドロレスの機体はすでに完成しているのでそのラプターが完成すれば実機での訓練も可能になる。

今回の模擬戦は、そのことも踏まえて沙霧大尉の部下の駒木中尉をはじめとした試験小隊の9人を相手にドロレスとシミュレーターデータのラプター2機でマスコントロールシステムを使用した模擬戦となる。

シミュレータールームで準備を進めていると駒木中尉たちの準備が完了したらしい、

「篁中尉、そちらの準備はどうですか？」

「大丈夫です、ドロレスは？」

《問題ありません。いつでもどうぞ。》

ドロレスも大丈夫なようだ。

「それでは、模擬戦を始めます。」

駒木中尉の宣言でシミュレーターが起動する。

戦場の設定は市街地、そこその大都市の廃墟、勝利条件としては駒木中尉のチームはドロレスの撃破、こちらの勝利条件は敵チームの撃破となる。

普通に考えればかなり不利な条件では有るが、マスコントロールシステムでラプター2機をどの程度操れるかによるが、やれない条件ではない。

駒木中尉たちの機体も戦闘支援ユニットをオフにした状態だ、数の不利は充分に覆せる。

「ドロレス、早速だけど使っわよ。」

《了解、マスコントロールシステム起動、ラプターと接続》

まもなく2機のラプターと接続し、それぞれの情報がディスプレイに表示される。

そして、それぞれの機体が観測したデータも入ってくる。

「ドロレス、左右に展開してまずは敵の情報を集めましょう。」

《了解》

ドロレスの返答と同時にラプターが動き出す。

大きく迂回するように駒木中尉たちは展開している、こちらは3機なので囲んでしまうつもりなのだろう。

囲まれるのはあまり面白い展開ではないので、

「ドロレス、まずは包囲を突破しましょう。」

《了解です》

そう答えるとドロレスは2機を近くに引き寄せ、楔型陣形アローヘッドワンを組ませる。

ドロレスを先頭にラプターが射撃で援護しつつ、包囲を完成される前にその一角から抜ける。

当然すぐに対応しこちらを追ってくるが、ラプターの射撃でかく乱しつつサブウェポンのファランクスで広範囲に弾幕を張りそれによつてまず駒木中尉たちの陣形を崩していく。

「ドロレス、そのままラプターはかく乱を続けさせて私たちは駒木中尉を落としましょう。」

《分かりました、ラプターを散開させます》

ラプターが散開して幾つかの機体をひきつけてくれる。

ラプターの性能はビックバイパーには劣るがかく乱のみに徹底させればある程度の時間は単機でも何とかなる、その間にドロレスで敵の指揮官である駒木中尉を落とせばと私は考えた。

駒木中尉の機体に対してその周囲にゲイザーをばら撒いて動きを制限する。

こういったサブウェポンはドロレスにもジェフティと同じように搭載されている、ベクターキャノン以外ではあるが、ドロレスにはベクターキャノンの代わりにマスコントロールシステムがある。

羽島大尉はドロレス以降の機体にもある程度のサブウェポンを搭載させるつもりらしく、ビックバイパーにも多数のサブウェポンを搭載している。

うまく駒木中尉の機体に近づけたのだがどうやら私の作戦ミスだ。眼前にまで迫ったとき駒木中尉の機体はこちらに向けてガントレットを放っていた。

「しまった！？ドロレス回避！！」

《だめです！間に合いません！！》

結果あえなく被弾、体制を崩してしまう。

何とか撃墜は免れたが、他の機体がこちらの退路を塞ぐ。

《囲まれています！？》

ドロレスが慌ててラプターを呼び戻そうとするが、そのせいで逆にラプターの制御が甘くなり1機が落とされる。

「ドロレス落ち着いて！」

《ああ！？ラプターが落とされちゃった！！》

ますます慌てだすドロレス、そのせいでもう1機の制御も甘くなりやはり落とされ、最終的にむこうの被害は0で囲まれた。

だがこれで終わりというわけではない、BETAとの戦闘となればむしろこんな状況ばかりになる、

「落ち着きなさいドロレス！」

私は駒木中尉に接近戦を仕掛ける。

BETAに対してはあまり意味のない戦術では有るが、人が相手なら誤射を警戒して撃ちにくくなる。

「せめて駒木中尉だけでも落とさないと、ドロレスデコイを出して！」

デコイでさらに後方からの射撃をそらす、これで駒木中尉以外の攻撃はある程度無効化できる。

そしてブレードで切りかかるが、同じくブレードで受け止められる。こちらは止まるわけにはいかない止まったらさすがに撃たれる。

すぐに側面に回り込もうとしたがそう簡単に逃がしてくれるわけもなく、

「甘い！」

駒木中尉の機体が飛行形態に変形しその場を急速離脱、8機のビツクバイパーによって包囲射撃され撃墜されてしまった。

「ゲイザーで周りを囲ったのはいいけどそのまま突っ込んでくるなんて機体の性能に頼りすぎよ？」

「はい、ドロレスの性能を過信していましたね、ごめんなさいドロレス。」

《いいえ私こそ本当ならADAさんのように助言も出来ないといけないのに》

シミュレーター訓練のあとの反省会で先ほどの模擬戦を振り返る、正直悔しい、羽島大尉は同じ条件で駒木中尉たちを撃墜していたので勝てると油断していた。

ドロレスにも悪いことをした。

「まあ、この経験を次につなげることが大事なんだし、切り替えてね？」

駒木中尉がドロレスを慰めてくれる。

余談だがドロレスはこの研究室と試験部隊のマスコットでもある、駒木中尉や部隊員みんなドロレスに声をかけていく。

「ドロレスの人気はすごいねえ。」

鑑少尉が嬉しそうにドロレスに言っている。

《皆さん優しくしてくれます》

ドロレスも嬉しそうだ。

「次からは実際の機体で訓練することになるからがんばりましょう。」

《はい、がんばります》

そう、次の訓練からはビックバイパーもドロレスもついでにラプターも実機での訓練になる、まずは羽島大尉が乗ることになるだろうけど私もがんばろう。

第5話 訓練中（後書き）

11月のはじめ頃に我が家の愛犬が病気で亡くなりました。

思った以上にショックがあったのか思うように執筆できずにいました。

そもそも投稿を始めたころから調子は悪かったんですが、癌にかかって気づいたときには転移もしていたそうです。

このことからこの世界でペットの動物はどうなっているのかと思ったんですが。

また、これからゆっくりですが書いていくのでよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885o/>

MUV-LUV-ZOE

2010年12月5日22時14分発行